

京都祇園祭の山鉾行事歴史資料調査

IV

公益財団法人祇園祭山鉾連合会

刊行にあたって

公益財団法人祇園祭山鉾連合会 理事長 木村 幾次郎

新型コロナウイルス感染症対策から解放され、四年ぶりに通常の形で催行された、令和五年の祇園祭山鉾行事。文化庁の京都移転に伴い、文化庁長官都倉俊一様に前祭山鉾巡行にご参加いただき、記念すべき年となりました。そして、秋には「祇園祭山鉾連合会百年の集い」を開催し、歴史資料調査をお願いしている先生方にご講演をいただき、興味深いお話を聴かせていただきました。

令和六年、祇園祭山鉾連合会の一〇一年目の新しいページを開くこととなります。この数年継続して進めております祇園祭歴史資料調査の四冊目の報告書を刊行いたします。当連合会の戦中・戦後の記録や函谷鉾町文書等の調査結果を取りまとめいただきました。長期にわたりご苦労いただいております先生方に心より感謝申し上げます。

凡例

- ・本書は、公益財団法人祇園祭山鉾連合会が令和五年四月から令和六年三月にかけて実施した、歴史資料調査の報告書である。
- ・本事業の調査体制については、巻末を参照されたい。
- ・本年度の調査に当たっては、公益財団法人函谷鉾保存会より格別のご高配を賜った。
- ・第一章で報告する資料は、祇園祭山鉾連合会所蔵「祇園祭山鉾連合会文書」と公益財団法人函谷鉾保存会所蔵「西楼門前石狛有志人名録」である。文書の翻刻については、別に凡例を掲げている。
- ・第二章には、令和五年十一月十一日にホテルオークラ京都で開催された同シンポジウムの基調講演をまとめたものとパネルディスカッションの書き起こしを収録した。パネルディスカッションの書き起こしは横田彩乃（龍谷大学大学院）が担当し、報告者が加筆修正を施した。
- ・本書の執筆・編集は、村上忠喜（京都産業大学教授）と下坂守（京都国立博物館名誉館員）、高木博志（京都大学人文科学研究所教授）、奥田以在（同志社大学准教授）、橋本章（京都府京都文化博物館学芸員）、村山弘太郎（京都外国語大学准教授）が行い、祇園祭山鉾連合会事務局と安井雅恵（京都市文化財保護課美術工芸・民俗文化財係長）・福持昌之（京都市文化財保護技師・主任）、今中崇文（京都市文化財保護技師）が補佐した。
- ・本書の掲載写真は、特に注記のないもの以外、執筆者が撮影したものである。
- ・本事業は、文化庁の令和五年度地域文化財総合活用推進事業（ユネスコ無形文化遺産）の助成を受けて実施する「祇園祭の文化遺産総合活性化事業」の一部である。

目次

| | | |
|---|-------|-----|
| 刊行にあたって 公益財団法人祇園祭山鉾連合会 理事長 | 木村幾次郎 | 1 |
| まえがき | 村上 忠喜 | 4 |
| 第一章 京都祇園祭の山鉾行事の近代資料 | | |
| 『自昭和十六年六月七日至同二十三年七月廿二日 祇園山鉾連合会記録 第四号』解説 | 村山弘太郎 | 6 |
| 『自昭和十六年六月七日至同二十三年七月廿二日 祇園山鉾連合会記録 第四号』翻刻 | 奥田 以在 | 100 |
| 八坂神社西楼門前石狛の寄付に関わるネットワークについて | | |
| 第二章 祇園祭山鉾連合会創設百年の集い・シンポジウムの記録 | | |
| 基調講演 | | |
| 祇園祭山鉾連合会所蔵文書に見る祇園祭山鉾連合会設立のころ | 村山弘太郎 | 106 |
| パネルディスカッション | | |
| 趣旨説明 | 村上 忠喜 | 114 |
| 歴史資料調査事業の趣旨とねらい | 今中 崇文 | 114 |
| 報告① 雪降るなかの祇園会 | 下坂 守 | 116 |
| 報告② 山鉾の装飾品を守る活動と努力 | 橋本 章 | 118 |
| 報告③ 戦後、〈神事なくとも山鉾渡す〉 | 高木 博志 | 121 |
| 全体討論 | | 123 |
| 調査体制 | | 126 |

まえがき

村上 忠喜

大正十二年（一九二三）、祇園祭の直前に組織された祇園祭山鉾連合会は、二〇二三年に創設百年を迎えた。祭礼執行団体の連合組織として、行政指導ではなく自ら組織化され、その活動が一世紀に及ぶ団体は他に類を見ない。

本調査事業の目的はいくつかあるが、祇園祭山鉾連合会の百年の歴史を振り返ることは、その大きな柱のひとつであった。同会の活動の歴史を詳らかにし、祇園祭の山鉾行事を支える人たちが、激動の近現代という時代をいかに処してこられたのかを知ることが、祭礼行事の継承についての豊かな知見を我々に与えてくれることは間違いないと確信するからである。またそれは祇園祭のみならず、全国の数ある大規模祭礼の祭礼維持の指針となるヒントも含まれているはずである。

第四集となる本書には、アジア・太平洋戦争を挟む前後の七年間の連合会記録の翻刻とその解説を掲載した。ここに今まではほとんど世になかった情報が記されている。今後解読される予定のGHQの資料と併せて、戦後すぐの祇園祭山鉾行事を考える基本資料のひとつとなるものである。

各保存会がお持ちの近現代資料の発掘も、本調査事業の大きな柱である。町文書の調査は、公的には京都市史編さん事業の中で進められ、その成果は、『京都の歴史』、『史料京都の歴史』に結実している。しかしながら、山鉾町地域の調査は他地域に先んじて行われたため、当時の資金的な都合

もあってか、基本的に近代以降の資料は網羅的な撮影は行われなかった。本年度の報告書には、新型コロナウイルス感染症明けの昨年度の下半期から取り組んできた、函谷鉾町文書のなかから、八坂神社西楼門前石狛の寄付に関わる資料を紹介して考察を加えた。函谷鉾町文書はすこぶる大量に残されており、未だ全撮影は終了していないものの、来年度上半期には完了する見込みである。

本書の後半には、二〇二三年十一月に、京都ホテルオークラで行われた、「祇園祭山鉾連合会創設百年のつどい・シンポジウム」（祇園祭山鉾連合会主催）での基調講演およびパネルディスカッションの記録を掲載した。当日は、山鉾連合会・各保存会は無論のこと、ボランティア団体や行政機関、関係企業などから約二七〇名という多くの方がシンポジウムを聞きに来てくださった。皆さんの関心の高さに、思いを新たにしたいところである。

新型コロナウイルス感染症の蔓延と同時に立ち上がった本事業であるが、遅々とした歩みではあるものの、確実に資料収集を進めてきている。また山鉾町の方々からも、「うちにこんなものがあるけど、見に来てくれ」といったお話も直接いただくような機会も増えてきた。大変ありがたいことで、そのすべてにすぐお答えするようなことができないもどかしさを感じている。

最後に、大変な忙しさなので調査準備の便を図っていただいた祇園祭山鉾連合会事務局や、調査に協力いただいた保存会など関係者の方々に篤くお礼を申し上げます。